建設通信新聞
平成30年2月1日（木曜日）

オールジャパンのノウハウ高く評価

足立敏之参院議員 ラオス・ナムニアップダム視察

足立敏之参院議員が、各団体の2018年賀詞交歓会でラオスの「ナムニアップ1水力発電所建設工事」を視察した体験を紹介している。周辺住民の移転や発電所運営といったソフトから施工技術の現地企業への移転までを一体で展開する日本企業の強みを実感し、「ダム建設事業やダム再開発事業も含めて、東南アジアに日本の技術を展開したい」と話した。

1月7―8日にラオスを訪問し、ナムニアップ1水力発電所建設工事を視察した。同ダムは、ナムニアップ1電力会社に対して関西電力子会社のKPICネザーランドなどが出資し、大林組が施工するなど、〝オールジャパン〟で施工を進めている。堤高167・0㍍、堤体積約230万立方㍍、総貯水量22億立方㍍という大規模重力式ダムで、日本国内では採用例の少ないRCC（ローラー・コンパクテッド・コンクリート）工法を採用している。

足立議員は、国土交通省の宮ケ瀬ダム工事事務所長時代にRCD（ローラー・コンパクテッド・ダムコンクリート）工法を採用した経験を踏まえ、「水密性を高める部分のセメントミルク注入方法や骨材の大きさ、コンクリートの配合など非常に合理的でスピーディーな施工を進めている。日本のダムは、高い品質を求めるため、従来の考え方から脱却できない部分があり、日本で受け入れられるかは分からないが、大変興味深かった」と感想を語った。

住民の移転についても、日本企業が協力している。「日本のノウハウが生きており、その手厚さが地域に受け入れられている」と〝チーム日本〟の強みを実感した。大林組が隣国・ベトナムの建設会社「ソンダ5」を協力会社として施工している点についても触れ、「ベトナム人技術者を指導し、育成しながら施工している。技術者を養成しながら施工することが非常に大切だ。そうした方法が脈々と受け継がれることが日本の信頼につながり、次の国際協力のオファーに生きてくるだろう。ぜひ運用面も含めて現地技術者を育成して次のプロジェクトを見いだしてほしい」と高く評価した。

ラオス・ナムニアップダム現場（2017年5月23日撮影）

東南アジアへのインフラ輸出を支援

日本のインフラ輸出については、「タイやベトナム、ミャンマーなど東南アジアではダム事業がまだまだ必要で、〝オールジャパン〟での取り組みが非常に有効と感じた」と話し、「アジア諸国の洪水対策やダムの再開発でも日本の技術は役立つ。今後も技術の海外展開を積極的に支援したい」との考えを示した。